

第六章 愛は奪われ行く

1

単調な、サイレンの音だけが一日の終りを告げる合図であった。幾重にも折り重なった山懐だけが、二人の逃亡者の安住の地であった。

男と女の生活が始まつてから十日ばかりが過ぎていた。仲むつまじい恋人同士、二人は蜜月の日々の中に身をおいていた。

ただただ、圭吾は玉江の肉体のみに溺れた。考えてもみなかった強烈な歓びに、もう、自分が脱走兵であることも忘れた。あの、眼球振盪症(しんとう)の症状も日増しに快方に向つていた。

一つは、湯治場を思わせる山間の湯泉の効用もあった。それに、もう人を怖れる必要もなかった。

圭吾には玉江が実の姉のよし子のようにさえ思っていた。やっと圭吾は玉江を歓ばせるために奉仕できる男になった。感謝の気持を表わすには、玉江に肉体の歓びを授けるしかない。

言われる通りに、口唇で玉江の秘部を愛撫した。

求められるままに女の愛液を吸った。

「うちのを食^くべて！舌と唇で食^くべるのや」

いいと言われるまで、彼は玉江の股間に顔を埋めた。女のもらす喘ぎの声に、歓びの強弱を知った。

玉江は登り詰めてくると吐く息よりも、吸う息のほうが強くなる。平らな岩室の寝所で抱き合っている時は、声が岩壁に反響するので、その凄まじい喘ぎ声を聞いているだけで暴発しそうになった。

玉江のためになら何でもできると思った。

女の体の不思議さについて彼はある種の感動さえ感じとっていた。男の側に余裕ができると、日々それぞれの反応の仕方に差異があることに気付いた。

玉江は、二二、三日、抱く時の主導権を彼に委ねた。どうしてもおのれの力で、圭吾は玉江を歓ばせなければならぬのだった。

ていねいに、やさしく責めると、それなりに快さの感じを返す。激しく、なお強く責めると苦痛の表情のなかにも歓びを表わした。

もつと、圭吾の眼を瞠みはらせたのは、女の体の各部がそれぞれに微妙に反応を示しているということだった。

いつも、玉江の大袈裟な身のこなしと、喘ぎの声に、半ば演技めいたものを感じていた圭吾だったが、その考えはまちがっていた。

玉江の反応の示し方の強弱につれて女体は正直に変化を表わした。玉江の白い肉体が朱を帯びてくる。

首筋から心臓の下あたりにその傾向が顕著だった。よくなつて行くと腹壁が強く絞られた。腰が逃げる。

それから、もつと強烈なのは結合部が息でもしているように、ぴくぴくし始め、じわ〜と締まつてくることだった。

玉江はだらしなく口を開け、眼を閉じているのに瞼の下の眼球がゆっくりと動き始める。虚ろな表情になり、首を支えている力が失われて果てるのだった。

「よかつたわー、うまいこと抱けるようになったなあ。もつともつと色んなこと教えてあげるよつてにな。ほんまはな、女の人、凄いいことよつたら、氣い失つてしまふんやで」

そう言つて玉江は圭吾を賞めてくれた。まだまだ圭吾は稚拙な男でしかなかった。

だが、玉江は、あの女の体の扱いに慣れた葉室勝の熟達した技の一つ一つを、この初心うぶな、男に仕込んでやろうと思つていた。

ある夜、玉江は食糧を手に入れるためにまた鉱業所の食堂まで足を伸ばした。

圭吾の分も食料は調達しなければならぬ。

生野の街まで一ノ瀬圭吾がやって来たということをも多分、足取り調査から憲兵隊は割り出しているはずだった。脱走の日、列軍は、雪害のため生野止まりとなっていたのだ。それで玉江は人の出入りする場所に圭吾を行かせることをしなかった。

近頃では大胆になり、直接、調理場に忍び込むことを覚えた。大きな鉄釜のそばに寄り、炊き立ての米飯を持参した袋に取り込んだ。

ちよつとした放れ技で、それだけに危険度も大きかった。その夜、とうとう玉江は罠に嵌まった。

「こいつやな！泥棒猫が」

守衛の一人が、物陰に身を潜めていたのだった。いきなり六尺棒で後頭部を一発やられた。

耳のうしろに当たったので、一瞬、ぐわーんと衝撃が伝わり、何も聞えなくなった。鼓膜を破られていた。

眼がかすみ、前につんのめったが、死力をふり絞つてよろと立ち上る。今度は前から、眉間めがけて角棒が振りおろされた。危うく身をかわすが、肩口に当たっていた。男が体当りして来た。その勢いで、うしろざまに玉江は倒れた。男と揉み合う。

「なんや、おまえ女子やな！」

男がひるんだ隙に体の上の男をはじき飛ばした。

頭の芯がくらくらしたが態勢を立て直し、身を起す。逃げようとしたら男が片足を掴んだ。

離そうとしないので、玉江は思いつ切り男の手を噛んだ。炊事婦の女たちが加勢した。竹箒が顔を目掛けて飛んできた。入口あたりにいた女二人に体当りを喰らわせ、表に飛び出す。しっかりとめしの包みだけは手にしていた。近くの竹林に飛び込む。

藁草履の足裏に竹の切口が刺さっていた。

玉江は傷には気付かず。坂道を転げ、闇に紛れてただひた走った。途中で口惜しさがこみあげて来た。

急に頭の芯がずきずきと痛み出した。

耳のあたりに手を当てたらぬらぬらとした血が手に

ついた。左足裏が痛くなり、歩いていられなくなった。それでも気丈な玉江はなお走った。

「こんな惨めな姿は圭吾には見せられない」

と思った。逃げて行く途中で、勤務の交替を知らせるサイレンが低い唸り声をあげた。

太盛山新坑の通用門を少し出外れた草叢まで来たら、急に眼の前が真っ暗になり、つんのめるように玉江は倒れ、そのまま気を失った。

明方近く、寒さのために眼が醒めた。

体中がすつかり冷え、眼ざめたら歯の根が合わず、かちかちと鳴っていた。

はじめに考えたことは、一ノ瀬圭吾のことだった。

澄んだ夜空が眼の上にあつた。

薄明の空だったが凍てた空にまだ星明りはあつた。

空がとても近いものに思えた。

ここに圭吾がいてくれたらと思つた。あたたかな体で抱きとつて欲しい。そう考えたら不覚にも涙がこぼれ出た。あれから何時間が経つたのか。

やつと体を起し歩き始める。

まだ、白□坑の棲家までは四里はある。

玉江の足でも小一時間はかかる距離であつた。

また足裏の傷がきずきと、痛み始めていた。それでも玉江は片足引きずりながら歩いた。

白□坑の横穴に辿り着いた頃にはもう朝の気配があたりには忍び寄っていた。薄藍色の空がすでに空の星の輝きを奪っていた。

「どこまで行つたのや。もう帰つて来んのかと思つた」まんじりともせずには彼は夜を過ごしたにちがいない。入口のあたりで帰りを待っていたのだろう。

玉江の姿をみとめると、岩の上から飛びおり、迎えるために走り寄ってきた。

その時から、何喰わぬ顔で、玉江は足を引きずるのを止めた。気付かれたくはなかつた。

途中、玉江は小川の水で傷口を洗つた。後頭部の傷

は髪の毛が隠してくれた。

今夜のことは口にすまいと彼女は心に誓っていた。自分の失態は知られたくなかった。

近付いてきた圭吾は、その時、いきなり玉江を枯草の上に押し倒した。

カヤの枯野がすっぽりと二人の姿を隠した。

後ろに倒された時、また頭の芯がずきりと痛んだ。が、玉江は嬉しかった。玉江は圭吾に身を委せた。

こんな迎え方のほうが好きだった。待ち焦がれていた男の真情が嬉しかった。冷えた体を圭吾が暖めてくれた。圭吾はもう、玉江の体がなくては生きてはいけない男になっていた。今は乳首を含んでいた。

小さい頃に母を亡くした圭吾は玉江の胸に縋り、無心に乳首を吸っている。玉江は一体感だけ欲しかった。疲れていた。

頭の芯が痛み長い愛撫に耐えられそうになかった。いつもなら、たっぷりと愛撫をさせてからしか、玉江は挿入を許さなかったのだ。

余程、長い時間待たされたのが辛かったのだろう。圭吾は言われるままに、体をつないできた。

荒々しく、玉江の下半身を剥いた。もう、当初のあの弱々しさはなかった。

2

「うちは小さい時からのみなし子やもん。それに、きょうだいもおらんかったから、えらい淋しい思いをしたわ。夜になると、けーんけーんと狐が鳴いて、また化かしに来よったかて父ちゃんがいもうもんやから、頭まで布団かぶつて寝たもんや。廁かわや）は外にあるもんやからよいかん、そいでよう日本地図かいておこられたわ」

「なあ、もうそろそろ教えて欲しいのや。なんで女一人で、こんなところに来たんや」

「あのな、うちは男はんが好きな性質たちなんや」

「好きて……それは」

「あほやな、あんたな、女が男はんが好きになつてしまつたらどないなると思つう？もう殺してしまいたい、そんな氣持になることがあるのやわ」

「殺すて、そんな」と？」

二人は山深い湯泉にひたりながら、そんな会話を交わしていた。頭の芯はまだ時折り痛んだが、肩口の紫色に膨れ上つていた傷跡は、温泉治療の効があつたのか、すっかり、跡がなくなつていた。

傷口は圭吾には転んで肩口を打つたと嘘をついた。

「あんた、女の人はな、ほんまに相手が好きになると男の人の、食へてしまいたいと思つうことがあるのや」

「食へるて？」

「ふふ、まあこれは例え話や。もし、あんたが死んでしまうことになつたら、うちはあんたを誰れにも渡さへん。このうちの住居にな、ずーと死んだかて住ませてあげる。それで、死んでもあんたを大事にしたげるわ」

こんな会話を持ち出したのは、まだ頭のどこかに葉室勝への思慕が強く残つていたからである。

いや、体への記憶といつたほうがいいのかも知れない。

圭吾の懸命ぶりは認めるとしても、まだ本当の意味での絶頂感は、玉江は手にしていなかつた。

それで、圭吾の眼を盗み、何度か、あの氷の室に玉江は寵（こも）つた。密かな情事とでもいうべき行為だつた。

死者と会話を交わし、勝のために股間を開いた。

やさしくて、巧みで、熱情に充ち溢れていた男……本当の女の歓びを授けてくれた勝（かつ）が生きていてくれたら……。好きな女に自分を殺させた男は、今も端正な顔を玉江に向けていた。

『女はな、男だけではあかんのや。自分でも愉しんでええのやで。女の体のことは男にはようわからんものな。わしに教えてくれ。女がな、自分で愉しむところを見たいのや。わしがそれと同じことしたる』

勝と知り合つた時、玉江はその眼の前で、このはずかし

い行為をやらされた。

その時と同じことを玉江は死んだ男の前で演じた。壁に背をもたせた姿勢の勝は、くつろいだ感じで坐っている男に見えた。眼は開けたままであった。

玉江は自分の股間がよく見えるようにしてやる。指をひそみに這わせた。肉のかたちをした核の部分に震えの感覚を伝えた。包皮の上からの愛撫は先端部だけに向けられたのではない。

ふつくと盛り上った基底部は三センチほどもあった。はじめは指先で小さな円を描く。ぴたつと基底部を覆うように指の腹を縦に密着させる。

少し力を入れると強い圧覚が生じた。いちばん好きなあそびは最後にとっておく。

包皮部分を上に引き、肉粒を露頭させる時の感じが玉江は好きだった。

「勝さん、勝さん……」と名を呼ぶ。もう瞼は閉じていた。勝とは一体感を味わった。葉室勝は死んでいたが、玉江は性の記憶の中に情人の男を呼びもどしていた。この、どこかおぞましい性の深淵をのぞき見たところで、一ノ瀬圭吾には到底理解のできぬ話であった。

「……死んでもあんたを大事にしたげるわ」と言われたところで、圭吾には何の現実感もなかった。

この玉江の呟きに、怪訝げげんな面持ちしか圭吾が向けて来なかったので、玉江は話題を変えた。

「あんたなあ、戦争にいてたら、今頃死んでるわ。若い兵隊はんはええ思いもせんと、お国のために死んで行くんな」

「ぼくみたいに逃げ出すよりましや」

「あほやな、あんたほんまにそんなこと思うてんのか？」

「そりやそうや。どうせこんな体や。ぼくは死ぬのが恐ろおつて逃げたんやない。戦車のな、下になって死ね言われたら立派に死んだる。そやけど、ぼくをいじめた奴の命令やったら絶対に言うことはきかんで」

「もうそんな話はええ。忘れえ、こゝは戦争なんかと関係

ないわ。ここにゐるのんはな、あれすることだけや。学がのうても、貧乏人でも、なんでもええのや、男と女でさえあれば、あれするのは自由なんや。うちは戦争に行く男はんの気が知れん」

「そらあ、ぼくかて…」

「よつしや、今日は凄いな」としよ」

湯泉近くの草叢に、持参した古毛布を敷く。風のない日で暖かった。三月に入ったばかりのある日のことである。湯を浴びた玉江の白い肌は朱に染まっていた。

豊かな乳房と腰太の下半身、二十六歳の女の体はとても美しかった。

「あんたは幸せもんやで、はよ、おいで」

二人はもつれるようにして倒れ込む。

「ほれ、指をかしてみ」

二人は向い合っていた。玉江は立膝をし股間を開いた。

圭吾はひそみに指を入れさせられる。

「な、わかるう？うちのは名器なんや。つるしぼぼと言うて、上のほうぢらぢらしてるやろ。うちのは複雑なんや、ほれえ、わかるか、指先に感じるやろ」

そう言つて玉江はその部分を締めた。指先に律動感が伝わった。玉江が力んでみせたのだった。

「なあ、男はんにもでけるんやで」

「締めるいうても」

「ちやうの。男はんのはな、大きゆうなつてな、そいで、びびつと来るのや。それが、うちのな、ここに伝わつて来る。凄いな、ええ気持なのや」

「もの凄う、よおなるんか？」

「そうや、凄いな」とな」

玉江の唇の端がちよつと引き吊つた。

「ええか、最高にしたるよつてにな、苦しゅうても、我慢するのやぞ」

二人の結合部はしっかりとつながれていた。

いつかと同じように玉江が上体をかぶせていた。その時、玉江が考えていたことは、勝とのあの時の凄い感じを一

所ひとところに感知してみたいということだった。

たしかにあの時、勝のそれは力が漲ったが、勝が告げほどの強烈さはなかった。

それが伝わる前に、萎縮し、勝は息絶えていたのだ。

圭吾を仮死の状態にすれば…勝が初めて首を締めるあそびを口にした時の蘇生の術の話を、玉江は思い出した。

「首を締めて三分以内なら、人工呼吸したら生き返るてだれかに聞いたことがあるのや…」

玉江はこの蘇生術を圭吾に応用してみようと思っていた。「ええか、ええか…ようなうて来たらいい」

丸い腰が圭吾のそれをしごきにかかる。玉江は上体を倒し、両手を圭吾の首に掛けていた。

両の親指が咽喉仏にぴたりと当てられる。両手指で首を持ち上げるようにした。

細くて頼りない感じの首である。

「うーっ、うっ…」

放つ寸前と見た玉江が思い切り指に力を込めた。一時的に失神させてやろうと思った。

「うっ圭吾は手足をばたつかせた。顔が真赤になった。

同時に下半身の一か所が怒張し、脈動感が伝われた。その瞬間を玉江は眼でたしかめた。

結合されたその部分だけを見ていた。おれの肉の穴をも思い切り締めた。が、余りの苦しさに、圭吾の下半身が大きくはねた。上につていた玉江は傍らに投げ出されていた。もちろん結合部は外されていた。

「なんや、あほみたい」

ちよつと恨めし気に玉江は言い、怖い顔をした。

殺意を内に秘めている女のように見えた。古毛布の、褥むとねの上で、二人は気まずい思いの顔を合わせた。

「なんや、ぼく…」

「苦しゅうても我慢しいて言うたやろ。あんたこらえ性がないのやな」

はじめて玉江は怒ってみせた。

「もうちよつとやったのや、最高になるのにな…」

未練がましいしゃべり口だった。

「ほなら、もう一回、首締めてもええ」

「もうええ、あんたにはまだ早いわ。男と女のこと、まだようはわかってないもんな」

「ぼくはこれでも…」

しよげ返った圭吾の顔は急に醜く見えた。眼球を一樣に見張った眼は、飼犬の狎ちんめのようにも見えた。

一匹の小犬が飼主の権幕に怯えていた。

「ええのんや、今のはうちの勝手や、そないに申し訳なきそうな顔せんでもええ」

ひよろりと立ち上った圭吾はめまいでもするのか、その場にうずくまってしまった。緊張感に耐えられずに眼ばかりを大きく見張った。「ふっふっ」と息声をもらした。

久しく影を潜めていたのに、玉江の叱責の声にまた病気の兆候を見せた。

やつと男を介抱してやる気になった。

「ごめんな、よっぽど苦しかったんやな。ええ、うちはあんたが好きになつてるからいじめとうなるんやで、分つてるか」

かすかに圭吾は笑った。

よく見たら首の回りに手の跡が残っていた。索溝にそって、赤い痣あざのような線ができていた。

3

快樂けらくのあそびのあとは暗い巢穴にもどる。口では許すようなことを言ったものの、まだ内心では、玉江は不甲斐ない男に腹を立てていた。

それで暗い坑道に入った時、いつもは先導して安全な一歩を歩ませてやるのに、少し邪慳にし早足で歩いた。

それなりの結合感覚はあったが、勝とは微妙な点でちがつていた。勝は女の歓ばせ方をよく知っていた。

同じことを圭吾に求めてもむりなのに、玉江はやはり愛した男の影を追っていたのだった。

こんな放将ほうらつぎを罰するためか、この日の帰途、二人の運命を狂わす怖ろしい陥穿かんせいが行く手に待ち受けていた。

坑道の中は今も危険な場所ばかりであった。井型の杭を打たれた豎坑はどこにぼかり口を開けているかわからなかった。足場を踏み外すと、奈落の底、釣瓶つるぶし落しに遇う。坑道の中にも障害物があつた。

樋引(とゆひき)に使う竹製の繰上げ樋の残骸に、体を突き刺されそうになることも、再々であつた。

ニガイ箱といわれる土まんじう型の、水吸上げ機の土塊に足をとられて転ぶこともあつた。

縫地ぬいじといわれた天井の土砂が急に降り落ち進路を塞ぐこともある。

堅穴の場所には玉江は雁木(がんぎ)を渡していた。

梯子だったが一本の樹を縄でつないだもので、足場になるよう斧で何カ所か、切れ目が入られていた。

爪先が掛かる程度の切れ込みである。急造の梯子だったが、生木を伐つて作つてあるので折れることはなかつた。早足で坑道を歩いていたら、一ノ瀬圭吾は、首を締められたために、少し頭がふらふらしていたのか、「ふつふつ」と、息声を発し続けていた。

また神経の糸が切れたのか、一歩ごとに、顔を左右に震わせているようだった。さつきから玉江の背後であの苦しそうな息声がしていた。二人は雁木の梯子に両手でつかまりながら、前へ前と進んでいた。

危ない足取りであつた。

やっこの思いで一本の雁木に掴まつた。足を蹴り上げ、一方の手で雁木を掴む危うさの一步であつた。が、その支えの雁木は、時折り、手が届かぬことがあつた。

突如、背後の暗闇で、圭吾の叫ぶ声を聞いた。

玉江があつと思つた時はもう遅かつた。

体が前につんのめり岩に頭がぶつかつた。おのれ自身の態勢を保つのがやつとだつた。同時に足元が危うくなつてた。片手に掴んでいたのは、冷えた空気だつた。

横倒しに肩から二メートルほど下に圭吾は落ちた。したたかに後頭部を打ち、同時に、背を打ちつけていた。「うーむ」と唸ったまま、息が継げなくなった。

玉江の呼ぶ声を聞いたが、それは遠くからの声なのか、耳元で発せられていることばなのかもわからなかった。そのまま圭吾は気絶していた。

玉江が駆け付け付けた時はもう一言も発しなかった。

「圭吾あんた、どないしたん！しつかりしい！」

肩を揺すったが返事がない。死んだのかと思ひ圭吾の胸に耳を当てる。どつきどつきと乱れた心臓音がしていた。やっと安心する、が、圭吾の後頭部には、べつたりと血糊が付いていた。

圭吾が眼が醒めたのはしばらくしてからのことだった。動かそうとしたら悲鳴をあげた。ぎっくり腰のような症状らしく、激痛にうんうんと呻き声をもらす。

「あー、ばちが当たったのや。ばちが当たったのや…」

うわ言のように、圭吾は苦しい息の下から同じことを繰り返した。

「あほなこと、言わんととき。ええか、うちが、ついているよつてに。気をたしかにもたなあかんぞえ」

だが、圭吾はもう弱々しい男になっていた。暗闇の中で泣きじやくるだけの男を見て、玉江もなぜか悲しくなり、一緒に泣いた。

彼らが住む岩室に行くにはもう一か所の堅穴を登らなくてはならない。それで、容態が回復するまで風が吹き通す坑道で暮らすことになった。

自分で立ち上れるようになるのに四日もかかった。高熱が出たが岩清水で冷やし氷室の氷片を頭に当て熱を下げた。しきりに寒がる圭吾を、一つ毛布に包み、抱いて寝た。

遠出はできないので玉江は近くの山で芽吹いた木の芽をむしり、川原に降りて雪の間から、露のとうを掘り

出した。あの一件以来、食堂のあたりには近寄れなくなっていた。ケヤキの樹の根元を掘りジムシを掘り出す。小さい頃に、義父に教えられた。甲虫の幼虫が腐葉土の中に、身を隠していた。

サナギになる前の芋虫状の白い幼虫であった。

剣(く)り型を作る時に出る木屑おがくずの中に幼虫を埋めておくと夏を迎える頃、ジムシは一丁前の甲冑かつちゅうをつけた枯れ葉を分けると、ころころ太ったジムシが十数匹もとれた。口の中で含むと甘い香りがし結構美味であった。飢えをしのぐためには姿かたちの美醜など問題ではなかった。

玉江は寝たきりの圭吾に献身的につくした。

食る物から下の世話まで泪ぐましいほどのやさしさを示した。だが、二人の間には少しづつ亀裂が生じ始めていた。陽気さと、生きる力をとりもどしていた圭吾が元の自分の殻に閉じ込もってしまった。

脊髓の大事な個所を痛めたらしく、圭吾は半身不随の体になっていた。下半身に麻痛感覚があり、両腕を使つて這いずり回らないと体を移動することがいできなくなっていた。眼球振とう症の症状もひどくなり、顔を動かすたびに震えが生じた。

「大丈夫や、うちが治したげる。一時的にな、こないな症状になっただけや。ええか、氣い行かせたら前みたいになる。あんたは若いんやからちゃんと元通りになるよつてにな」

玉江は口癖のように言い、圭吾の股間のものを口に含んだ。前にも増したやさしさの気持を込めて愛撫する。だが、麻痺した圭吾の下半身のそれは力を示さなかつた。股間におかれたものは、死んだ虫のような形状を呈し縮こまったままだった。

来る日も来る日も、玉江は施療者になり、狂ったように圭吾のものを口に含んだ。

「もうええのや。幸せなんてどこにもあらへん。そやろ、これまでのことが、夢みたくてやったのや。一緒に入営し

たみんなは、お国のために命を賭けて戦うところに、
ぼくだけがここで新婚生活をしとったのや。話がうます
ぎるわ。ぼくはえらい罰当りや。意気地なしのな、臆病
もんんで、その上、足手まといの人間になつてしもうた
…」

「なに言うてんねん。あんた、うちを抱きとわないのんか。
。うちの体はな、あんたなしでは生きられんようになつて
る。あんたのな、ここがうちは欲しいのや。どないしても一
人前の男にしたる、あんた、まだ二十二歳やないの」
「もう言わんといてくれ。この穴の中で死ぬのがぼくの運命
やったのや。ぼくは死ぬ気でここへ来たんやからな。な、も
う覚悟はでけてる。お願いやから首締めてくれへんか。あ
の時、苦しさを通り越したらな、ええ気持になれるん
やないかと思つたのや。今度はな、ほんまに我慢でき
そうない気がするのや」

「あんたが死んだら、うちはどうするん？この暗い穴の
中で一生一人で暮らすんか。考えてもみい、うちはあ
んたがおるから生きて行けるんやで。男はんがおらんと
な、うちの体はどもならん、体が、かーと燃えてきてな、
抱かれとうなつて、もう苛々してしまうのや」

「ほなら、このままぼくが役立たずになつてしもうたら、
あんたはここを出て行くんか。脊髄やられてしもうたら
、もう男のつとめはだけへん。これで二度目のことやから
な。ぼくはあんたに捨てられるだけや」

「大丈夫や、元気になるて。うちはそないな薄情な女や
ないで」

玉江には圭吾がとても愛しく見えた。

童貞の若者に一から性のすばらしさを教えた。

「これからがもつと激しいものになるーその望みが断た
れようとしていたのだ。」

が、男の機能は元のようにはもどらなかつた。

這つて行くことはできたがすでに歩行困難になつていた。暗い廃坑内に閉じ込められた圭吾は、時折り、悪夢にうなされ、汗をびつしよりかいた。

うわ言なのか、菅原二等兵の名を呼んだ。

便所の隙間から目撃した首吊りのシーンが夢の中で再現された。彼はずっと自分の心を責め続けた。

「ぼくが殺したようなものや。ぼくは地獄に落されるのや。やつとな、あの菅原二等兵の氣持がぼくにもわかるようになった……」

その、ことばかりが、彼の頭の中には、渦巻いているかのようだった。

いつか、玉江は圭吾との間に齟齬をこの氣持を持つようになつた。自分の体がどうにもならぬ苛立たしさに、彼は、わがままな男になつた。無口になり、玉江のやさしいことばも受け付けなくなつた。

苦勞して集めてきた食物にも注文をつけ、挙句の果てに、食物を拒否した。

「もう、飢えて死にたいのや。かまわんといってくれ」

三日も断食してみせた。この時は危険覚悟で人里まで遠出し、人家に忍び入つて白米のめしを手に入れた。やつと圭吾は口にしたものの、体力は明らかに衰えていた。男と女の情が通じない、そんなやる瀬ない日々が、このところ、続いていた。

ある日のことであつた。

玉江は、体の内から兆してくる欲望を押さえきれずにいた。生身の人間なのに、圭吾は生ける屍なのだった。ひとり、岩室のほぼ直下になるあの氷の室に通う日が多くなつた。葉室勝の冷えた肉体に玉江は情を通わせたのだつた。小さな陰毛の毛束が、勝の生きている時の感触をそのままに伝えてくれた。

勝はよく指で唇をやさしくなぞる愛技を施した。

まるで毛先でくすぐるのように微細な感じを伝えた。玉江はくすぐつたさの快感を自分の唇に授けてやる

。今は、この愛の分身は勝のやさしい手そのものだった。

玉江の指は内腿にと伸び、そこにそそーとしたくすぐりたさをつくった。腋窩えきかの溝のくぼみにも這い、そして尻の双丘のすぼまった谷にもほうき草で撫でるような快感が伝えられる。

思いつ切り、玉江は喘ぎの声をあげる。

岩室に籠もる自分の声の切なさ、なお身を悶えた。その声に酔った。

「勝さん……あんた……」もう、死んだ男と一体になっていた。黒い毛飾りのひそみに指が差し入れられる。

かすかではあったが出入の行為の中に、勝の、かつての、やさしさが呼びもどされて来るのを感じた。

寒さの中の行為なので体が冷えて来る前にせわしなく指を動かせた。それだけ気を行かせた。

「ああ、気が行くう…勝さん、うち、もう…ああ、気が行くう…」玉江は一人で喘ぎ、乱れた。

その時、圭吾は、堅穴の入口まで這って来た。もう何度も地底からの喘ぎの声を聞いた。

悪霊たちの呻きの声とも聞きとれた。

岩壁にはね返り、人の住まぬ坑道のさらに深い地底から、泣き声とも、怨みの声ともつかぬ叫びが充ち充ちていた。きまつて、玉江が地底に降りて行くと、身をゆするような、その鬼哭きこくの叫びがわき起った。

この日、堅穴のすぐ上で耳を澄ますと、かすかではあったが「勝さん……」と呼ぶ玉江の声を聞きとることができた。あの、性の激しさに身をよじらせる時の喘ぎ声であることも知った。圭吾の胸のうちに、強い嫉妬心がわいた。

どうしてもその声のするほうへ、一步をすすめたかったが、それ以上は体がいうことをきかない。

這つてきただけで腰椎に痛みが生じていた。

暗い地底の穴から、冷たい風が吹き上げてきた。

風だけが彼の頬を打った。

やがて、風音を騒がせた地獄の声音はふいと掻き消された。何事もなかったかのように堅穴の雁木を伝つて、

玉江がもどつてきた。

彼はいきなりそんな玉江に詰問した。

「あほやな、うちは時々、昔の男の夢を見るのや。そいで夢の中でその男の人の名を呼ぶのやわ。そやろ、考えてもみ、この地底の穴ん中にもう一人、生きてる人がおるなんて考えられる？」

「そやけど、あの声は」

「ひとりでな。楽しんできたのや。うちかて切のうなることかてあるやろ」

「ぼくがこんなんやから…」

「そうや、うちが可哀想や思うたら、はよう、ようなつてえ。あんたのな、女々しい気持がいちばんようないのや」

「あかん、あかんのや…やっぱぼくは罰当りなのや」

「あんたが罰当りやつたら、うちなんか、もうとつくに地獄に墮ちてるで」

玉江は圭吾を抱きかかえるようにして岩室まで連れて行く。寝藁の床は、背骨を傷めている圭吾のために、玉江がわざわざ作つてやつたものだった。

この夜、また、圭吾は高い熱を出した。体にさわると火のように熱くなっている。これで何度目かの発熱である。

それでも、氷の室から氷片を切り出し、冷やしてやると朝方にはどうやら熱は下った。

氷片を持ち出す時、玉江は氷の体になった勝に頼み込み、「あの人を死なせたらあかんぞ」と独りごちた。

その願いが叶えられたのか、圭吾は朝にはうまさうに岩清水をごくごくくりとのんだ。

「あんな…ぼく、夢を見てたわ…この体がもうちゃんとして治つてな、ほら、あの温泉のそばで二人は抱き合つてたのや」

「それはもうすぐよくなるいつこの報せやで、きつと」

「おかしい話なんやけどな、ぼくがな、赤ん坊を腕に抱いてたのや」

「赤ん坊、ほなら、うちらの子お？」

「ああ、そうや。よう太つてな、ぼくら顔見て笑うてた」

「ほんまにうちのお腹の中には二人の子供がおるのやも知れんな」

玉江は圭吾を喜ばせようと思つてありもしないことを口にした。

「そいで、その子は男の子やった？女の子やった？」

「どっちともわからん」

「あんたはどっちがええのんや」

「そやな、ぼくの生れ変りやとしたら男の子やけどな、そんなん可哀想やわ。弱虫言われてしまふもん、やつぱり、女の子がええ」

「女の子かあ」

ちよつと玉江が考えたふうのことを言う。

「そやろ。女の子やったら戦争にも行かんですむもんな」
闇の中だったから玉江には圭吾の表情はしかとは見えなかつたが、ぶつりとこゝろが途絶えたので、圭吾の心の裡（うちをふと垣間かいま見たような気がした）

「二人は結婚したのやからな。赤ちゃんがいちもちつとも不思議やないで」

「…ああ、ぼくな、姉さんとへあそびに行つた時にな、ああ姉さんは幸せやなあと思つたことがあるのや。この生野の鉱業所の社宅やけども、まだ生まれたばかりの赤ちゃんがいいて、五年前のことや、女の子で薄桃色の産衣を着てた。そいで、部屋には火鉢があつてな、鉄瓶のお湯がちんちん沸いてるのや。よしや、ぼくかて、姉さんみたいに幸せにならざつて、その時、心に誓つたのや」

「ええ話やな、うちかていつまでもこんなとこにいるわけやないで。あんたが元気になつたらな、うんと遠いとこへ行、そしたらな、あんたの願い通り、うち、女の子を生んだげるとついな」

玉江は圭吾が不憫になつていた。

小さい時に父母と死別した境遇は玉江とよく似ていた。なぜか涙が溢れそうになつた。一晩かかつての看病疲れもあつたが、いかにも運のない男という気がした。

玉江は気付いてはいなかつたが、同情の気持の中に、いつし

か、愛の心が芽生えていた。

考えてみれば、玉江も暖かな父母の愛に飢えていた。荒んだ気持のまま生きてきたのもどこかに、そんな家庭的な暖かさに嫉妬する気持があつたからにちがひなかつた。ふと、泪したのは、多分に、自分への不憫さの気持があつたからである。弱い者同士、玉江は強がつて生きてきた自分の弱い部分をつかれたような思いになつた。

そう思うと、無性に圭吾が愛しくなつた。

はじめて玉江は圭吾に泪を見せた。

圭吾の髪を撫で、愛しそうに痩せ細つた頬のあたりに指を這わせた。「くっくっく……」と圭吾も肩をふるわせる。

「ええか、あんたにはうちがついてるぞ。どんなことがあつても守つてあげるよつてに。うちはあんたが好きになつてるのや」

玉江は泪に濡れた頬を圭吾の顔に押し付けた。

やつと、心と心が一つになつたような気がした。

いや、それだけではない。

いつか、葉室勝の時に持つたよう、切迫した気持になつた。

“命の薄さ”を一ノ瀬圭吾にも感じとつていたのである。

この若者を失うまいと思つた。

5

ある日、また圭吾が高熱を出した。

二日続きの高熱でいつもと様子がちがつていた。

火を焚くことを慎んできた玉江だったが、今度ばかりは、そうもいかなかつた。圭吾のために煎じ薬を作つた。

義父の教えてくれたみみずの煎じ薬だつた。

枯葉を分け、黒い土を掘ると何匹ものみみずが見付かつた。小刀で腹を割く。

はらわたには毒があると聞かされた。

一匹二匹、小川の水で洗つてから、拾つてきた土鍋で煎じた。これは熱さましの薬になる。

夜半、百姓家に出かけて行き、鶏小舎に忍び入つて、

鶏の首をひねった。いたちか狐の仕業と思ひ込ませるために網の下部をそれらしく破り、鶏の羽毛をあたり一面にまき散らし擬装工作をした。

鶏の素つ首を切り落し、生血を圭吾にのませた。

骨の殻でスープを作る。肉は保存食にするために落葉でいぶし燻製にした。

「ぼくは、もうあかん、長うはないでえ。やっぱり戦争にいつて死んほつがよかつたのや…」

圭吾はまた弱気な男になっていた。

もう死にたいと口癖のように言い、駄々をこねた。

火を焚いた翌日の午後、急にまわりの山が騒がしくなつた。川原に降り、沢蟹を漁つてから密堀坑の横穴に入ろうとした時、眼下に人の群れを見たのであつた。

十数人の男たちが白口坑の方角に向けて山を登つて来る。みんな手に手に武器をかざしていた。

「えらいことや、山狩りや」

玉江は火を焚いたことを後悔した。

煙が立ったのを誰れかが、目撃したのかも知れない。

それに、食堂での泥棒猫事件、鶏泥棒と点と線をつなげば、山狩りも理由のないことではなかつた。

岩室に身を潜めていれば絶対に発見されない自信はあつたが、食糧の調達や、街に出かけることには、かなりの制限を受けることになる。

「あんた、声を立てたらあかんぞ」

二人は穴ぐらの中でじつと息を潜めていた。

熱のために体中の関節が痛み、その上、だるさが圭吾を襲っていた。饑すえた匂いの敷藁の中で先程から圭吾はうんうんと唸っていた。

相変らず菅原二等兵の亡霊に悩まされるらしく、うとうとしたと思つたら急に「うえっ……」と奇妙な声をあげ、眼を醒ました。圭吾は恐怖心に駆られていた。

「うとうとぼくは捕まるのや。ぼくは敵前逃亡兵とおんなじや。もう、どうもならん。どうせ捕まるんやったら頼むか

ら殺してくれ。そや、いつかみたいに首締めて欲しいのや。自分では死にきれん情けない男や。ええから、この細首、思い切り締めてくれ…」

「あほなこと、その時はな、うちも一緒に首締めて欲しいわ。死ぬんやったら一緒にな。今のあんたはうちの首締める力ないよつてにな。あんただけ死なすわけにはいかんのや」

駄々をこねる圭吾のために、玉江は上半身裸になり、圭吾の唇に豊かな乳房を押し付けた。

もはや、圭吾には双乳を手でつかみとる元気はなかった。だが、首の甘酸っぱい匂いが圭吾の鼻翼をかすめた。

赤ん坊に含ませる母乳の匂いがした。

突き出した唇が、乳首の一つをとらえていた。

添乳をしている母のように、玉江は乳首を、いつまでも含ませていた。が、圭吾は、いつか、顔をそむけてしまう。

「ああ、もう一度でええから、玉江はんを抱きたいのや」

はじめて圭吾は“玉江はん”と彼女の名を呼んだ。

生真面目で、照れ屋の彼はなかなか玉江の名を呼べなかつたのだ。

「そいで、ええ気持のままぼくは死にたいのや。そやろ、玉江はんには抱かれながら、首締められるんやったら、そない幸せなことはないで。こんな体になつたんが、うらめしい…」

「うちの体が欲しいと思うたら治るのや。なあ、お願いやからうちを夢中にさせて。うちのはえらい具合いがええのや。どんな男はんでも喜ぶのや。な、思い出すのや。うちかて欲しいん。これは気の病いや、あんたの一念で治すのや」

額の濡れ手拭いを代えてやる。

「ありがと、ぼく、がんばるぞ…」

この時、遠いさんざめきの声だったが、玉江はなおも近付いてくる人の気配を耳敏く聞き分けた。

「だいじょうぶや、この岩穴をみんな探ろうと思つたら二、三十年はかかるで。いまは戦争してるのに、そんなことしてたらどもならんも」と

そう言い残し、玉江は様子を窺うために、岩室を出、白口若林坑あたりの横穴の一つから男たちの動向を観察した。

山に分け入った彼らは、あたりの木を伐採し始めた。「いくら逃げたかて、食い物がなかったら生きて行けんでえ。あほな奴らや」

「鉦山夫とかいうたつて、わしらより、ぎょうさん、仕事きつい分、儲けとるのにな。あいつら、よう、逃げるようでえ。今度は三人組か、了見の悪い連中や」

「この穴で暮らせんことはないけど三日と持たんで」「めし付き、風呂付や。ほんま、餓死するより、ましやと思うけどな」男たちは口々に勝手なことを言いながら山の木を伐り、若林坑の入口を木で塞ぎ、そこにバリケードを作った。鉄条網も張り巡らせる。

おおよその状況は読めた。不逞労務者の何人かが鉱業所から逃げ出したのにちがひなかった。

逃げ延びたのか、それともすでに捕まり、今後の用心のために穴を塞ぎに来たのかはわからなかった。男たちが去ったあと、山はいつもの平静さをとりもどしていた。

6

朝来郡あさご和田山の藤和地区に、玉江は足を踏み入れていた。

一ノ瀬圭吾の熱病はなお病状が悪化した。いわゆる満州熱と呼ばれるもので、人間に寄生する蚤やしらみなどが媒介する。鉱業所寄宿舎から持ってきた衣類の一つに寄生虫が潜んでいたのであった。

玉江は、圭吾の口から和田山に住む姉のよし子の居所を聞き出した。

熱病を治すための薬と食糧、それにいくらかの金を用立てしてもらつたことを考えた。

このまま放置すれば、圭吾は衰弱が激しくなり死んでしまうかも知れなかった。

藤和地区は周囲を山々に囲まれた辺境の地であった。鉄鉦山、東床尾山、西床尾山など、七、八百メートル級の山々が控えており、人の住む村落はその山裾野に張り付くようにして点在しているだけだった。

玉江の足には山越えは苦にならなかった。

かつて、日高の奥深い山々を踏破したことがある。

難行苦行の道も玉江なら平地を歩く速度でこなせた。ちようと、生野から和田山の神子畑選鉱所に行く、貨物列車が発するところだった。

無蓋車の一つにもぐり込み、すっぽりと頭からキャンバスをかぶる。汽笛の響きがとても勇壮なものに聞えた。レールを嘔む軌轍音に心から感謝したい気持だった。

圭吾の病状は一刻を争う状態だった。

いくつか長いトンネルを越えた。

明方近く、和田山に着く。

東の空の山端が薄藍色に染まり始めていて、朝が間近であることを知らせていた。

このあたりは豪雪地帯で知られる。銀白色の山の頂きは、やがて、その背景に明るさを忍ばせてきた。

線路伝いに養父やぶ方面に向けて歩く。除雪された道だったが、まだまわりの樹々は深い雪を、かぶったままだった。

圭吾の姉の嫁ぎ先である藤和は冬期になると孤立してしまふほどの奥地であった。

特に今年は初頭か雪量が多く、また遅い春のためかなりの雪が各地には残っていた。

九十九つづら折りに曲がりくねった峠道をたどり、玉江は一人道を急いだ。

本当なら山中に入り、人目につかぬよう行動するのだが、この積雪量ではいくら健脚の玉江でも足をとられて前にすすむことは不可能だった。

圭吾から教えられたたった一つの目標物は藤和の大將軍杉だけだった。

樹齢百年といわれる巨木で、峠道の際にあり、そこか

ら程遠くない場所に目的の地はあった。

だが、初めての場所で玉江は道に迷った。

方角がわからなくなっていた。

石地蔵をまつた小さな祠(ほこら)があった。お地蔵様も目標点の一つだった。一安心して、玉江は、そこで足を止めた。

雪の深さは一メートル余はあった。このところ冬の往来は絶えているのか行く手の雪道は荒らされていない。

峠道を半ばまで入ると人家もなくなり、行く手はただ白い雪野原になった。峠道といっても深山幽谷の道ではない。畑地があったり、雑木林があったりで、比較のおだやかな地形であった。

ただ曲がりくねった道はかなりの急勾配になっている。

雪道は中央部がずっと雪かき道になっていたが、凍てついたところもあり、用心しないと足を滑らせそうになる。喘ぎ喘ぎ峠道を登ったら右手に天を突く高さの大將軍杉があった、

雪を頭からかぶった大きな杉の樹の下は暗くなっている。高さ四十メートル、幹の太さは、大の大人が三人は手をつながないと抱え切れないと思われた。

目標地点をひとまず見つけので、玉江は疲れも忘れた。縮(ちぢか)んだ手足の冷たさも忘れた。

この大將軍杉から上に登り、五十メートルも歩くと小さな藁葺きの百姓家があった。

重い雪に藁葺き屋根はおおわれている。崩折れそうにたった土壁の納屋があり、母屋にもたれかかっていた。薪が軒先に積んであった。

少し外れた場所の、庇(ひさし)の屋根にも雪がふんわりとついている。一本の柿の樹があり、裸の枝が寒そうに風に吹かれていた。

圭吾からはこの柿の樹のことは言われた。

彼自身はこの地を訪れていなかったが、書信で姉からは訪ねて来る時の道順、目標物などが知らされていたのだ。表に表札はなかった。玉江は裏に回った。

鶏小屋があり、搔きならされた黒土の上で数羽の鶏が餌を食んでいた。コツコツと人の足音を聞きつけて用心深い警戒音を発した。

主(あるじ)のいなくなつた鶏小舎をのぞいたら、地卵が二つ、まだ巣箱の中にはとり残されていた。とつぜん、子供の泣声があった。

母親のちよつと高い声が続く。裏の勝手口は半分ほど開いている。農具置場の小屋があり、その中に身を潜ませると、少し中の様子を窺うことができた。

暗い土間があり、上り櫃かまちの板の間が見えた。むずかつた女の子が勝手口の際で泣いていた。

お河童頭で、齡は五歳ぐらい、よく見るとどこか圭吾と似たところがあった。圭吾が語ってくれた赤ん坊にちがいないと思つた。

いつか圭吾の腕にも抱かれたことがあつたのかも知れない。赤いじんべえを着ていた。ふくらした小さな手がしきりに眼のあたりをこすっている。

奥から祖母らしい女の声が届いた。

「けいこはよこちへ来い！」女の子の名は「けいこ」というのだ。何となく玉江は圭吾のことを思つた。

勝手口を出た左手に釣瓶式の井戸があつた。

女なら井戸水を汲むために井戸端に立つ。

その機会を玉江は待つとうと思つた。

誰れに知られてもまずい。

こゝは姉のよし子の嫁ぎ先であつた。

もう午前八時にはなつてゐるだろうか。雪は深いのに陽光だけは春のものになつてゐる。

空腹のために玉江の腹がなつた。

貨物列車を降りてからはかなりの強行軍だつた。

四、五時間は歩いたことになる。やつと、よし子らしい女が、洗濯物を抱えて井戸端までやつて来た。

玉江が身を寄せた。

「あの、どろが乾いて、一杯のましていただけませんやろか」不意のことで女は眼を見張つた。

押しかぶせるようにして、玉江がことばを続けた。

「あの、圭吾さんは無事ですから、それで、うち圭吾さんの代りに、ここに」

髪の毛を後ろで引つ詰めた丸顔の女だった。

髪の毛がほつれていて生活の疲れが出ている。驚きの表情がほつとした安堵の表情に変わる。

だが、まだ口元は引き吊っていた。

「家のものがおりますから、こちらから」

先ほど、玉江が潜んでいた農機具小屋に誘われた。

「よし子さんでしよう。お姉さんのことは、圭吾はんからよう話に聞いてます」

小屋に入るといきなり両手を握られた。軼あかぎれのしたざらした手だった。

「生野の廃坑跡に。それで熱の出る病氣してて体が弱ってる。どうやつても救ってあげたいんや。それで薬と食物、あの、それからもつと遠くへ逃げなあかん思うて、お金も一銭もないものやから」

「ここへ来たらあかん。憲兵の人が来て、みんなひどい目に遇うてるのや。ここは見張られてるかも知れんし。うちの人がて圭ちゃんのことようは思うてへん。出稼ぎに出ていまはおらんけど、爺ちゃん、婆ちゃんに知られたらえらいことやわ」

暗い小屋での立話だった。

よし子は三十前の齡のはずだったが、玉江よりずっと老けているように見えた。

その時、また母屋のほうで子供の泣く声があった。

「待って、でけるだけのことはするわ…」

よし子が、そそくさと、その場を出て行く。

十分がたち、二十分がたった。

よし子はなかなか現れない。

小屋の奥に格子窓があった。棧が入っただけの粗末な造りである。その窓の向うに、急な斜面の杉林が見えた。梢の雪は払われていて、青黒い針葉が天を刺していた。子供の泣く声はもう止んでいた。

杉の梢をかすめるようにして一羽の鳥が飛んだ。わずかに残っていた雪が枝のしわみで、ぱーっと白い粉をあたりにまき散らす。がーっと鳥は嫌な声を発した。

ぐうーとまた空きつ腹が鳴った。

なんだかとても人間らしい音だと思った。一人の男のためにごままでやって来た。一ノ瀬圭吾のことがほんとうに好きになっていたのだ。愛なのかどうか、玉江にはわかっていなかったが、男につくす歓びがわいてきた。

あの、若い肉体にいま一度、男のいのちを甦らせてやりたい。何から何まで一から性の処法を教えた男なのだ。もつともつと凄いいものにしたい。

身がとろけ、熱く爛ただれるまで玉江は性のすばらしさを堪能したかった。いまは圭吾のことが愛しい。

圭吾の背負った不運な日々に傷ついた者同士心のつながりを見つけ出した。わたしがいなければあの人は…その思いがなによりも玉江の心の支えになっていた。

やっと裏口が開き、よし子が姿を現わした。

小走りにやって来、小屋の木戸をそつと開けた。

「待たせてしもうたな。なんせ貧乏世帯やから、これしか用意でけへん。中のもんはあとで開けてえ、時間があらへんものね。それからお金は十二円しか都合できんかった。あ、それからね、握りめしが入ってるから道々食べて。氣い付けてね」

布製の奉公袋を手渡された。

「あんた、お名前はなんて言うの。くわしいことは、きかんけど、弟をよろしゅうな」

「はむろかつこです」

玉江は嘘の名を告げた。自分が殺人犯の女で脱走中の身であることが知れたら、よし子が悲しむと思ったのだ。圭吾には、ふさわしくない女である。

「…たった一人の弟でな、なんや、幸の薄い子や。わたしもよう面倒みてやらんと、それだけが気がかりでな。どうか、弟のことよろしゅうお願いします…」

あとは泪声になった。古びた木綿地を仕立て直したモ

ん。んは、じぎはじぎが当っている。

「生きてたら、きつとええこともあるのや。そないに言うて下さい…」

よし子は声を詰まらせた。

「それからうちのごとは圭吾さんとは関係のない女にして下さい。どんなことがあるやも知れんもんね。もしうちが捕まるようなことがあっても圭吾さんの居場所は絶対にしゃべりません、腹がへつて物乞いに來た見知らぬ女や言うことにして下さい」

「ほんまにありがたいことや。あの子のこと、くれぐれもよろしゅう…」

玉江はよし子のごとばを背に小屋を出た。

ふと振り向いたらよし子は両手を合わせ、何度も何度も頭を垂れていた。一期一会の出会いであった。

杉林の道に下り、迂回して元來た道に降り立つ。

再び雪掻き道に出ていた。

右に左に二つほど道を曲がると、あの大將軍杉があった。なんだか急に疲れが出てきた。

握りめしのごとが頭にあつた。

きのうの夜から何も食べていない。

木株は優に四メートルの太さがある。根瘤（こんりゅう）が地表に張り出していて、ちようど腰掛けの代りをしてくれた。玉江は奉公袋の中味をあらためる。

富山の生薬に、げんのしょうこ、じゅうやく、よもぎ草の乾燥したもの、大根の切干に、干瓢、梅干し、それから引き抜いたばかりなのか、根に土のついたゆきのしたが入っていた。心ずくしの品々であった。

それに米一升ばかりに大豆が少し、いちばん嬉しかったのは生卵が二個入っていたことだった。

竹皮に包まれた握りめしは二個入っていた。

沢庵が添えてある。夢中で一個を平らげた。

沢庵をかじる。久し振りの味だった。ぱりぱりと噛み砕く。玉江にはとても新鮮な音に思えた。

生きている気がした。

二つ目の握り飯には手を出さなかった。

圭吾のことが頭をかすめた。自分だけ豪華な食事をしてはすまないと思った。

一個の握りめしが腹に入ったら急に尿意を催した。

それに余裕が出たのか、少しばかりいたずらごころが生じた。誰れも見えていない雪の世界、ここには一人だけの空間があった。手つかずの純白の雪が、眼の前にはこんもりと盛られている。

玉江はモンペを降ろし、尻を丸出しにした。

しゃがみ込み、一気に放尿した。

あたたかな小水に打たれてその部分だけ雪が溶けた。勢いよく飛び出したので雪の表面に穴が開いた。

湯気が立つ。「ああ、わたしやっぱり生きている」そんな嬉しさの情がわいた。

が、これまでの一部始終を木の陰に隠れて見ていた男たちがいた。尻を剥き出しにした不用意な姿勢のさなか、背後から玉江は声を掛けられた。

「おい、なにしてる？」

そこに立っていたのは顔のいかつい男であった。彼らは、平服を着、烏打帽をかぶっていた。

あわてて玉江はモンペをあげ、立ち上る。

「なにしに来た？ よっぽどこのことがないとこの時期、ここへ来るものはおらんぞ」

小便したあとの雪は溶けてぐちゃぐちゃになっていた。

無邪気なあそびは、無惨なかたちだけをそこに残した。すでによし子の家は、地区の憲兵隊の監視下におかれていたのである。

脱走兵の系累であることで、よし子の家は村八分の状態におかれていた。よし子の夫は農事の手伝いをして生計を立てていたのだが誰れも声を掛けてくれなくなり、止むを得ず、他村に出稼ぎに出ていた。

この家に近付くこと自体が危険であったのだ。

連絡網は密にできていて、怪しい者が近付けば、村の駐在に通報がもたらされるようになっていたのだ。

戦時下の駐在巡査は、当時村では村長・学校長と並び村の三長官といわれたほどの権限を持っていた。

昼間の警邏は廃止され、もっぱら、各種視察・内偵・捜査・防空・兵事などの時局下急務の処理に当たっていた。

この場合、密偵役を買ってでていたのは村の駐在巡査で、地区憲兵の手先機関としての役目を負っていたのだ。玉江は咄嗟に逃げようとして身構えた。

山中に迷い込んで逃げ延びる自信はあった。

が、鳥打帽の男の背後には猟銃を構えた二人の男がいた。いつときでも早く、圭吾の所にもどり、新鮮な卵や、握りめしの味を味わわせてやりたかった。

このやさしさが仇になった。

近道をとるために人里への道を辿ったのがいけなかったのだ。雪は深くとも裏山に入っていれば発見されずにすんだかも知れない。

なぜ捕まったのかやつと玉江にはわかった。

大将軍杉を見つける前に、地蔵小屋の前で一休みした。その時、ちらと人影を見かけた。

地蔵小屋の裏手の小さな物置小屋の中に老婆がいた。屋根のある場所なので、お地蔵様に詣った道ついでに、老婆はそこで一休みしていたのかも知れなかった。お地蔵様に捧げられた一輪の梅の花が雪をかぶっていないかったのが、急に生々しい感じで思い出された。

事実、この時、玉江の姿を目撃した老婆の口から、緊急手配の方策がとられたのであった。

長い時間歩かされた。村人たちの好奇の眼にさらされながら駐在所に連行された。

鳥打帽をかぶった男は巡査姿に変身した。

丸帽に詰襟ボタンのサージ服、サーベルを腰にした男はたちまち威丈高になった。

所持品から不審者として取調べを受けたが、玉江は圭吾のことは一切しゃべらなかつた。

二日目の朝、駐在巡査はよし子をこの場に連れて来ると脅かした。あくまでも面識者同士であるという前

提に立っていた。「白状せよ」と強要され、髪の毛を掴まれて何度も机に頭を打ちつけられた。

憲兵隊が間もなくやって来るとも告げられた。

圭吾と姉のよし子を守る方法は一つしかなかった。

「わたしの本名は尾形玉江です」

はむろかつこと名乗っていた玉江は、自分の名を明かした。もはや、観念した。

「あそこでは情にすがって物をいっただけです。握りめしと生卵をもらっただけで、他のものはよその百姓家で盗んだものです」

それからよどみない口調で玉江は自分の犯した罪のことを述べた。殺人・死体遺棄・放火、脱走の罪である。

間もなく本署から照会の結果が知らされてきた。

尾形玉江が、手配中の最重要脱獄囚である事実が判明した。駐在所の巡査は凶らずも大手柄を挙げたことになる。この殊勲の逮捕劇には追って恩賞の沙汰があるはずだった。たしかに、脱走兵と、殺人・脱獄囚との関係はどこにもつながりがなかった。

一脈のきな臭さを感じとることもできたが、駐在巡査はすっかり時の人になり、それ以上、一ノ瀬圭吾と玉江との関係までは、追及しなかった。

両手錠、それに足首まで手錠が噛まされて、駐在所の留置場の、板の間に転がされた。

翌日、二名の刑務官が、北神拘置所から身柄引取りのために和田山まで出向いて来た。

駐在所を出る時は、物見高い村の連中が彼女を取り巻いた。玉江はこれでもう自分の素姓はよし子に知れてしまうと思うと悲しかった。小さな子供が石を投げた。

まるで刑場に引き立てられて行く女死刑囚だった。

「人殺しの女や」そんな騒ぎ声も聞えてきた。

〈昭和二十年三月六日〉

まだ冬景色の暗さが残っている空は、心冷え冷えとするものだった。風も寒い。

「ぜつたいにまた逃げてやる」と、玉江は心に誓った。

あの廃坑の暗闇こそが玉江にとって現実の世界なのだ。玉江がいなくては圭吾は一人では生きて行けない。

どうしも圭吾には自分が必要なのだ。いや、あの性の歓びをどうしても今一度、圭吾の肉体に甦らせてやりたかった。二人だけの自由な性の世界、そこには全(まったき)き裸の男と女の歓びがあるはずであった。

奔放な、性への強い想いに玉江は身を妬き始めていた。

玉枝は護送警官に付き添われている身であった。

山陰線の福知山を経由し、途中、神有電鉄の三田で乗り変える。終点の湊川駅までは、ずっと、下り勾配路線であった。途中、いつか降りたことのある鈴蘭台駅を通過した。この盆地の街には、菅家吉蔵の持家であった旅館があった。この山間の小さな街も幻の絵になり遠くへと、過ぎ去って行った。狭い山間の線路道の両側はやがて裸岩の切り立った光景に変わる。菊水山の駅を通過する。二角錐のとがりを思わせる山々が重なって見えた。いまは、逃げ延びた道を逆行しているのだった。

菊水山を越し、いくつかの山を巡ると、その山裾野に北神拘留所がある。行き着く先は未決監だったが、菅家吉蔵を空襲下を利用して殺害、焼き捨てようとしたこと、そして看守の林亥之助を、逃走を目的に殺害したこと、この二件だけでも間違いなく、死刑の断罪が下るはずだった。

尾形玉江は「戦時重罪犯」の一人であった。

電車は一路、南(南へとひた走る。

港のある街は、いま、戦いのさなかにおかれていた。

山の尾根を巡る電車は、時折り、見晴らしのいい場所に出た。急に山の壁が切れ、視界が開けるのであった。

すすむ方角には、春まだきの、霞(かすみ)のかかった海が、わずかに光って見えていた。

何となく、のどかな光景にも見えたが、港に沿って広がる神戸の街はやがて敵機の目標下に据えられる。

過酷な運命が春ののどかさとは裏腹に、この街には用

意されていたのである。

戦いとは無縁の逃亡生活だったのに、市街地へと走る電車は、玉江をむりやりに、戦火のただ中へと、連れもどそらうとしていた。

(第六章 了)